

# 尾崎紅葉における形容語での「可」の用字について

増井典夫

## 1. はじめに

私の学生時代の研究のスタートは、大学3年時に気になった、「すごいかわいい!」「すごく」を「すごい」として使用するという表現についてであった。この「すごい」で程度修飾する副詞的用法はいつ頃からみられるのか、という疑問については、その当時はほとんど答えを得られなかったが、代わって「えらい大きい」「えらく」でなく「えらい」を使用」といった表現が近世後期から使用されていることがわかり、それが、卒論修論での研究の、一つの中心テーマとなった。

ところで、修論の段階で、明治期の「えらい」「おそろしい」形の副詞的用法を調査していく過程で、尾崎紅葉の作品に行き当たった。

尾崎紅葉の『多情多恨』（明治二十九年・一八九六年）や『金色夜叉』（明治三〇～三五・一八九七～一九〇二年）では、「えらい」を「偉い」、「おそろしい」を「可恐い」、「すばらしい」を「可感い」といった表記が見られる（『金色夜叉』では日本近代文学館の複製本本文、『多情多恨』では日本近代文学館所蔵の、明治三〇年に春陽堂から刊行された本文（初版第三刷のもの）を使用しているが、本稿では『金色夜叉』『多情多恨』とも初版本と称していく。なお、これ以降、漢字は新字

体で示している)。

・「其よりもつと偉い話がある、」(『多情多恨』初版本三四六頁)・

・「あら、まあ金剛石ダイアモンド??？」

すばらし  
「可感い金剛石。」

おそろし  
「可恐い光るのね、金剛石。」

(『金色夜叉』、初版本前編一八、一九頁)

なお、今回の論考は増井典夫(二〇一三)『近世後期語・明治時代語論考』第六章、和泉書院(元論文は二〇〇三及び二〇〇四)を踏まえた上で、検討を加えたものである。

## 2. 先学の研究について

形容語の「可」についての先学の研究としては、まず玉村文郎「尾崎紅葉・幸田露伴の漢字―『多情多恨』と『五重塔』―」(『漢字講座9 近代文学と漢字』所収、明治書院、一九八八年)が挙げられる。ここでは、「可―」型の形容詞の多用は「近代中国語の表記への接近」だと指摘する。

次に、岡本勲「自然主義文学の漢字」(『漢字講座9 近代文学と漢字』所収、明治書院、一九八八年)では、「可懐なつかしい」と「不可いけない」という表記は「花袋・藤村・秋声に共通して見られるもの」の一つとして挙げられている。

他、近藤瑞子『近代日本語における用字法の変遷―尾崎紅葉を中心に―』（翰林書房、二〇〇一年）では、形容詞「ツライ」についての検討の中で、「伽羅枕」（明治二三・一八九〇）に見られる「可愁」の表記を表中で示している。

### 3. 初版本と全集本の校訂など

『金色夜叉』の「初版本」と『明治文学全集』、『多情多恨』の「初版本」と岩波版『全集』とを比較すると、次のような違いも見られる。

まず『金色夜叉』でだが、次のような違いも見られる。

初版本	明治文学全集
なつかし 可懐さと可耻さを（中編一〇三） い 可厭らしい（後編一〇〇） ラッア 情人（統編五九） いや 不好きな（統々編六三）	なつか 可懐しさと可恐しさと可耻しさを（一八二頁） い 可厭い（二二八頁） い 情人（二五八頁） いや 不可な（三〇四頁）

なお、初版はパラルビ、明治文学全集では総ルビとなっているが、明治文学全集は中央公論社版『尾崎紅葉全集』（昭和一六年刊）によっている。中央公論社版の本文は初版本より後の、紅葉自身の校訂の手が入っているとされているものである。

『多情多恨』では、次のような違いが見られる。

<p>初版本</p>	<p>紅葉全集（岩波版第6巻）</p>
<p>可恨さう（一三頁） 可怨しさう（二二頁） 可睦く（七〇頁） 可疎さう（九七頁）</p>	<p>恨しさう（一二頁） 怨めしさう（一七頁） 睦しく（五二頁） 疎しさう（七二頁）</p>

『紅葉全集』は「原則として初版本によった」としているのだが、「誤記・誤植を正した」とはしている。これらはいずれも注記なしの「訂正」（「誤記・誤植を正した」ということか）がなされていることになる（宗像和重校訂）。また『紅葉全集』には「振りがなほ補った場合がある」とは書いてあるが、ルビを取った場合があるとは書いていない。

当該箇所を見る限り、この岩波版『紅葉全集』「第六巻」は「初版本」よりも明治文学全集がよった中央公論社版『尾崎紅葉全集』「第五巻」（昭和一七年刊）に近く、「初版本」よりも「可一」型の形容詞表記を減らし、現代での一般的表記に少し近づけたかのように感じられる。それは紅葉の晩年の表記の感覚を反映したものか、とも思われる。

このほか、

<p>初版本</p>	<p>紅葉全集（岩波版）</p>
<p>殘刻（二四頁） と富んどる（三五頁）</p>	<p>殘酷（一九頁） と富んどる（二六頁）</p>

などといった「訂正」もあるが、これらも注記なしの訂正である。なお、『金色夜叉』には「残刻」が6例（中編一二頁）に1例、中一八五頁に4例、中一八六頁に1例）ほど見られるが、岩波版『紅葉全集』第7巻、さらには『明治文学全集』でも「残刻」となっている。

#### 4. 「可笑しい」「可愛い」「可哀そう」「可憐」など

さて、『金色夜叉』などに見られる尾崎紅葉の特徴的な表記として挙げられる「可」の字を用いた形容詞・形容動詞の表記だが、このうち「可哀」「可愛」「可笑」「可笑しい」「可憐」などはかなり一般的に見られるものである。ただ「可哀」「可憐」は特徴ある読みが見られる。

「可笑しい」については『日本国語大辞典』に、

高山寺本名義抄「可笑 ヲカシ アナヲカシ」

の例が挙げられており、古くから使用させていたと思われる。

『大漢和辞典』には、このほか、「可疑」「可恨」「可憎」「可惱」などといった表現が立項されており、これらも中国語の影響と見て良いものだろうか。ただ「可惱」は『大漢和』では「腹立たしい」であって「悩ましい」ではないが。

他、例えば『江戸明治唐話用例辞典』（笠間書院、二〇〇八）には「可口」「可是」「可笑」の三項目が立項されている。

さて、尾崎紅葉の表記の特徴は、「可哀」「可憐」の読みの他、これら以外の表記例に多く見られるように思われる。まず、「可哀」「可憐」を含む、複数の読みの例があるものを次に挙げる。

可哀（あはれ、かあい）可憐（いとし、しをらし、あはれ。「伽羅枕」では「かはゆし」）  
可傷（いたはし、いたまし）可忌（いまはし、うとまし）加愁（うれはし。「伽羅枕」では「つらし」）可恐（おそ  
ろしい、こはい、こはらしい）可羞（はぢがまし、はづかし）

これらの例は紅葉の特徴が見られるものであろう。一方で、紅葉の試行錯誤が見られるもののようにも思われる。

## 5. 『金色夜叉』に見る形容詞の送り仮名

送り仮名について、『金色夜叉』での形容詞について見てみる。用字例はク活用のもものが「可愛<sup>かはい</sup>い」「可憎<sup>にく</sup>い」「可<sup>い</sup>い」の3種で、残りはシク活用となる。

シク活用のもものうち、①送り仮名で「い」または「き」しか送っていない、あるいは何も送っていないものがある（14種）。次に挙げる（「中八二」は「中編八二頁」に見られることを示す）。

可傷 <sup>いたはし</sup> 可傷き（中八二）  
可痛 <sup>いたはし</sup> 可痛（統八）  
可傷 <sup>いたまし</sup> 可傷（統一一）可傷く（統々一四）  
可憐 <sup>いとし</sup> 可憐（前八六）可憐き（前一〇二）  
可怜 <sup>いとし</sup> 可怜さ（統一一三四）  
可懼 <sup>おそろしい</sup> 可懼（前一三六）

可悲かなしき（前一三六） 可悲かなしさ（続四六） 可悲かなしき（続々八七）

可好このまし（中一三七）

可感すばらしい（前一九）

空可恐そらおそろしく（後二）

可艱なやましげ（後七五）

可恥はづかく（中一二七）（『全集』でのルビは「はづかし」）

可慚はづかしく（後九）

可難むづかしげ（後一二二）

なお、「続々八五頁」には「悲かりしは」（ルビなし）という例も見られるが、「可悲かなしき」と「悲かなしき」の違いは分からない。

一方、②「し」から送っているものは次のようなものである（10種）

可訝いぶかしき（続一四〇）

可疑うたがはしき（続一一四）

可疎うとまし（中五三）（他三例）

可忌うとまし（後七九）

可愁うれはしき（後一六三）

可耀かがやかしく（後九八）

可頼 たのも (前九八)  
 可惱 なやま (前二四七) (他二例)  
 可羞 はぢがま (前六八)  
 可煩 わづらは (中四一) (他一例)

③「い(き)」だけ送る(何も送っていないものも含む)ものと、「し」から送っているものの両方見られるもの(12種)

可忌 いまはし (中三一) (他三例) 可忌しき (前五六) (他二例)  
 可恨 うらめし (後一三七) 可恨し (前一〇三)  
 可羨 うらやまし (前一五七) (他一例) 可羨しい (前五三) (他三例)  
 可恐 おそろし (前一九) (他十三例) 「おッそろしい」一例含む 可恐しき (前九一) (他四例)  
 可憐 しをらし (続一三四) 可憐し (続二二〇) (他三例)  
 可慎 つつまし (中二六) (他一例) 可慎しう (中七五) (他二例)  
 可懷 なつかし (中八九) (他五例) (他「可懷む」一例あり)。可懷しき (前八三) (他四例)  
 可羞 はぢがまし (前四三) 可羞げ (中八五) (他二例) 可羞しげ (前一一七)  
 可愧 はづかし (前九八) (他一例) 可愧しく (中七三)  
 可耻 はづかし (続々八八) 可耻しい (中四一)  
 物可恐 ものおそろし (後一四三) 物可恐しげ (続々一〇)  
 可笑 をかし (前三六) (他六例) (他「可笑な」一例あり)。可笑し (後八九)

活用語尾にだけ送りがなを送るとすれば、①となるが、現在は読みやすさの兼ね合いで②の「し」から送ることになっているかと思われる。③を含め、紅葉の試行錯誤がうかがえるだろう。

全体として、初めのほうでは「き」または「い」しか送っていない場合が多く、後になるほど「し」から送る、という傾向が見られるように思われる。

ただ、作品全体ではパラルビであっても、「可ー」型の形容詞には全てルビを振っている。これはルビなしでは読めない場合がある、との判断であろうが、結果、どれだけ送りがなとして送ろうが、読みやすさには関係ない、ということになっているように思われる。

さて、3節でも触れたが、紅葉は晩年に近くなって形容詞の「可ー」型表記を減らしている可能性があると思われる。全体として、晩年に近づくほど送りがなは多くし、「可ー」型の形容詞表記は減らし、結果として現代での一般的表記に少し近づいた、という傾向は認められるようにも思われる。

## 6. 近代の他作家にみる「可ー」型の形容詞表記について

さて、玉村文郎は挙げていないが、幸田露伴『五重塔』には次のような「可ー」型形容詞の表記例がある。

○千々に砕くる心の態さまの知られていと可憫いぢらしきに、(『露伴全集』第五卷220頁、岩波書店)

『五重塔』は明治二四(一八九二)年の作品であり、紅葉の初期作品、例えば「わかれ蚊帳」(明治三三年)の次の年に

刊行された作品であり、「可—」型の形容詞表記を使用したのは紅葉一人ではないことがわかる。多用したのは紅葉一人だとはとは言えようが。

ほか、露伴の他作品なども検討課題となる。

また、紅葉の作品より後となるが、二葉亭四迷の作では「可怕い」「可怕」「平凡」明治四〇年・一九〇七」といった例も見られる。

○何となく奥底が見透されるから、祖母が何と言ったつて、些とも可怕くない。（『二葉亭四迷全集』第一巻、424頁、筑摩書房）

○急に何だか可怕なつてきた。（同、424頁）

後年の作では島崎藤村の作では「可傷しい」「可傷しい」（『新生』（正七〜八年・一九一八〜一九一九）といった例が見られる。

○一頃のやうに恐ろしく神経の尖つた、可傷しい調子は彼女の手紙の中に無かつた。（『藤村全集』、第七巻、243頁、筑摩書房）

○延びよう／＼として延びられない彼女の内部の生命の可傷しさを語るかのやうでもあつた。（同、300頁）

ほか、近代での他作家で「可—」型の形容詞・形容動詞は、「可笑しい・可愛い・可哀そう・可憐」などの語以外で使用されていたものがあるのか、あるとすればどの語がどの年代まで用いられていたかなどを調査することも課題だと考えている。

## 7. おわりに

和語に漢字を宛てる、紅葉の努力は、試行錯誤の繰り返しだったようにも思われるが、近代日本語の中でどのような意味を持つものだったのか、あるいは意味などないという結果に終わるものだったのか。もう少し考えてみたいところである。そもそも和語に漢字を宛てる意味の重要性はどのようなものだろうか。さらに検討を続けていきたいと思っている。ところで、現代の作家、小野不由美の作品に「可怪おかしい」という表記が見られる。

○阿選が登極した経過はいかにも可怪おかしかった。(『白銀の墟おか 玄くろの月』(一) 65頁、2019年、新潮文庫)

どこか中国を思わせるファンタジー小説であり、あえて中国風の表記ということで「可怪おかしい」という表記を選んでいくようにも思われる。今後、注目していきたいことの一つである。

さて、本稿は第118回漢字漢語研究会(二〇一九年八月一日 於・早稲田大学)での口頭発表を基にしたものである。そこでの質疑応答で、様々な貴重な意見をいただいた。例えば、玉村論文にあった「近代中国語の表記」の影響という点では、橋本行洋氏に指摘いただいた、白話小説等での語列の確認が今後の検討課題となる。また木村義之氏に指摘いただいた読本での調査も検討課題となる。

他、笹原宏之氏のご教授に感謝を申し上げます。今後さらに努力していきたいと考えている。

(文学部・文化創造研究科教授)